

過去 10 年間に於ける景気と大卒者の進路の關係

—都道府県パネルを用いた觀察—

酒井正

国立社会保障・人口問題研究所

要 旨

90 年代後半以降、わが国では新卒労働市場が著しく悪化し、不安定就業する若年者が増加した。それは大卒者においても例外ではなかった。だが、若年者は景気循環による就業機会の變化に受動的に甘んじているだけだろうか。たとえば大学院に進学することで、労働市場に出ることを猶予するという行動も考えられる。90 年代は、一連の制度改変を背景として大学院の拡充が進んだ時期でもあった。都道府県ごとの大卒者の進路に関する情報をパネル化しておこなった推計より、前年失業率の 1%の上昇は男性大卒者の進学率を 1%弱程度引き上げることがわかった。女性については、前年失業率の代わりに賃金指標が大学院への進学決定に影響を与えていたことが見出された。だが同時に、男性・女性いずれにおいても、一人あたり大学数という供給側の要因が進学率にプラスに寄与していた。景気が新卒市場に及ぼす影響を巡っては、今後は進学率への影響についても併せて配慮して政策を考える必要がある。また、供給側に対する施策が果たす役割も大きいと思われる。